

金蓮秀
小説全集

七

金達壽小說全集 七

筑摩書房

金達壽小説全集七

一九八〇年五月二十日第一刷発行

著者 金達壽

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 (営業) 元一七五二 (編集) 二五〇一六二

振替 東京六四二三

印刷所 三松堂

製本所 鈴木製本所

装幀者 田村義也

金達壽小說全集

第七卷

第七卷 目 次

太白山脈	7
------	---

解題	505
----	-----

〈著者うしろがき〉わが文学と生活(一) 仕切り屋になる	509
-----------------------------	-----

太白山脈

第一章

一

夜が明けはじめた。劉連淑はふと目をさまし、見ると、明り通りの窓が白んで来ていた。彼女ははっとなったように、寢床のうえへ半身をおこした。

「それでも」と、彼女は思った。へいつの間にか眠ってしまったのだ。

別に、眠って、わるいというわけではない。だが、彼女はその時間を、刻々を、眠ってすごしてしまうのは惜しいような気がしていたのだった。

劉連淑は、白んでいる、天井に近い二尺四方ばかりの明り通りの窓を見つめていて、白省五のことを考えた。彼もいまごろはこうして目をさまし、白んで来ている明り通りの窓を見つめながら、きょうという日を迎えているのであらうか、と。

彼女は、監獄の房の明りとり窓がどうなっているか、見たことはなかった。が、白省五の入れられている房に、それがあるということは知っていた。いつだったか、面会に

行ったとき、それを訊いてみたのだった。

「窓は、どうなっているのでしょうか。あるのですか」

鉄網越しに対している白省五の顔は、陽にあたらないために、青白くなっていた。

「ああ、あるよ。高いところに——」と、彼は笑った。

「空が、四角に見える」

以来、それからというもの、劉連淑はいま自分が借りて住んでいる部屋が、白省五のいる房とおなじもののようかと思えて来たのだった。ただ、彼女のばあいは、扉が鍵のかかっている鉄扉ではなく、背をかめてでもそこから自由に出入りできたが、しかし、なかは小さな明り通りの窓が一つあるきりで、見ようによっては、監獄のそれとほとんどおなじだった。

だが、劉連淑はむしろそのことに、ある慰みを見出して来た。そうして、たった一つきりしかない明り通りの窓を、白省五の入れられているそれとおなじものと見なし、見つめて、きょうまで暮らして来たのだった。

それは、彼女ばかりではない。この国の何千、何万というものが、そうして耐えて来たことであったのだ。

やがて劉連淑は、手早く布団をたたんで部屋のなかを片づけ、服を着かえて外へ出てみた。ひんやりとした新しい空気が張りつめていて、気持ちよかった。が、ソウルの街はまだ、しんと眠ったままだった。

夏の夜の明けるのは早い。だが、まだ午前四時となった

ばかりで、人々が動きはじめるまでにはもう少し間があった。しかし、劉連淑には、それが少し不満のように思えた。だいたい、人々がいつものようにそうして眠っているというところが、彼女にはふしぎなような気さえた。

それがいわゆる「嵐のまえのしずけさ」というものであり、爆発を準備している寸前のそれであったことを、劉連淑も間もなく知るのであるが、彼女は何となく、近くにある独立門の方へと歩いて行きながら、きのうの真昼のことを思いだしていた。それからの半日もこのようにしずかだったが、これでいいのだろうか、と彼女は思っていた。

きのう、そのことを知らせてくれたのは母家の中学生、金相寧^{キム・サニョ}だった。劉連淑はこの日も、いつものように病院へ出かけようとして、自分の部屋を出たところだった。彼女は、ソウル駅に近いセブランド病院で、洗濯婦として働いていたのだ。

すると、その彼女を見た金相寧が、母家のなかから走り出て来た。彼は学校の勤労働員で、漢江のどこかで土方のようなことをさせられているとのことだったが、この日は朝から家にいたのである。

「ねえさん」と、金相寧はいつも劉連淑を、そう呼んだ。「どこへ行く？ きょうは休んだ方がいいですよ。ぼくの部屋へ来て下さい。これからいっしょに、正午のラジオを聞きましょう」

「あら、どうして、私はこれから……」

「あら、どうしてじゃないですよ。きょうはこれから、重大ニュースがあるんだ。正午に、日本の天皇が放送をするんです。何だと思う？」

金相寧はそういいながらも、あちこちにと目を光らせていた。自分の家のなかにもかかわらず、——それは、一つのくせのようなものとなっていたのだ。

「日本の天皇が？」と、劉連淑も声をひそめた。「それはどんなこと……」

「いいいよ、戦争はおわりです。そして兄さん、そうだ、兄さんと呼ばして下さい。白省五兄さんも帰って来ますよ。そうしてぼくたちの朝鮮は、独立するんです」

「独立——」

劉連淑は、一瞬、ぼんやりしたように、金相寧を見つめた。ついに、その日が来たというのか。

そこで、彼女も病院へ行くのをやめて、半分は金相寧手製の、そのラジオの前に坐った。一座は、相寧の母親と三人だった。相寧には街の清掃夫として働いていた兄が一人いるが、彼は徴用されて日本へ連行されており、父親は二年まえに亡くなっていた。

ラジオは、金相寧が汗をながしながら一所けんめいになつて調節をくりかえしていたが、はじめから雑音に包まれたままだった。そのはげしい雑音からして、いつもとはちがっていた。劉連淑は身じろぎ一つしないうで、ラジオをじっと見つめて坐っていた。

やがて正午、はげしい雑音に包まれたなかから、その声が聞えはじめた。金相寧は固くなって坐った膝のうえに両手をおき、じっと下の床の一点を見つめたきりだった。相寧の母親もどこか不安そうな、うつろな目をラジオにすえていた。

「……万世のために泰平を開かん……」

はじめて聞くその声は泣くような、訴えるような、そんなおかしな抑揚であったが、しかしいつていることは、はっきりしていた。と、そのときだった。

「きえッ——！」

突然、金相寧が奇声を発して、すつくと立ち上った。そして彼は、「あつは……」と乾いた笑いをあげながら、そのまま外へ飛びだして行ってしまった。

劉連淑はなにかを力いっばい耐えるようにして、じっと坐ったまま動かなかった。体が大地へめり込むような感覚に、身をまかせていた。

へ省五は、夫は、いまこの放送を聞いただろうかと、彼女は思った。

聞いているはずがない。しかしながら、彼も間もなくそのことを知るだろう。

「どうしたえ。戦争、どうなったというのだい？」

一人だけ、日本語を知らない金相寧の母親はまだ事態を知らず、劉連淑に向って訊いた。

「はい」と、劉連淑は目にたまっていた涙を、一度にボタ

リと床へおとした。「いま、たつたいま、戦争がおわったのです。私たちの朝鮮は、これから独立するのです」

それから劉連淑もまた、金相寧のあとを追うようにして、外へ出てみたのだった。もちろん、相寧はどこへ行ったか姿も見えなかったが、仁旺山、北漢山、三角山、南山と、ソウルの市街をとり囲んでいる山々は、依然としてそこにそびえ立っていた。

そして真夏の陽のさんさんとふりそそぐソウルの市街も、依然としてそのままだったが、しかし街は、瞬間、死んだようになって打ちしずまっていた。ときたま行きかう人があっても、それはまだ、いまなにおこったか、その事態を知らないものたちだけだった。

こうして、一九四五年八月十五日のソウルは、しずかに、こともなくその日を送ったのだったが、それが劉連淑には、どうしても物足らなく、不満のように思えてならなかった。へきのうは、それでいいとしても、彼女は思った。きょうまでがこんなにしずかなのは、これはいったいどうしたことだろうか、と彼女は考えた。

前方に、うすい朝靄に包まれた独立門が見えて来た。その石造りの独立門は一八九六年、皮肉にも朝鮮の独立が失われようとしていたとき、清国から独立したとして建てられたものだったが、それがきょうはさらにまた、特別な感慨をもって劉連淑には見えた。

門の周囲は、きのうのうちに誰かによって手入れをされ

たらしく、あたり一面、道路までがきれいに掃き清められていた。劉連淑はその道路に立って、強い感慨の迫るままに独立門を見上げていたが、ふと、そばの空地に白く咲きみだれている雑草の花に気がついた。

姫紫苑だった。その花は夏咲きはじめるをやがて散り、散るとともにまた新しい花を咲かせるのだったが、それがいま朝露に濡れて、生き生きとした花卉をそよがせているのであった。

「ああ、おまえはまた咲いたのか」と、劉連淑は思った。彼女は、胸のつまるのをおぼえた。

劉連淑は独立門から引き返し、借りている部屋へ戻ると、街の人々から強いイロニーのこもった口調で「皇国臣民」と呼ばれていた趙光瑞が来て待っていた。彼は珍しくいつものボロ服姿ではなく、きょうは、ネクタイこそはしていなかったが、白いワイシャツにりゅうとした背広服をつけて、縁側に腰をおろしていた。

「ああ、おじさん、待っていて下さったんですか。部屋へ上っていて下さればよかったのに——」

劉連淑は、趙光瑞と会ってわかれたのは三日ほどまえだったが、きのうという日をあいだにしていたから、ひどくなつかしいような気がした。

「いやいや、わしはこう見えてもやはり男子の一員じやから、ひとり居の婦人の部屋へ上り込んでいるというわけに

はまいらんのだな。はっはは……」

趙光瑞はあたりによくひびきわたる、明るい声で笑った。そんな彼の笑い声は、劉連淑はこれまで聞いたことがなかったように思った。

「こう見えてもって……」

彼女は趙光瑞の服装の変っているのに気がつき、部屋の扉に手かけたままのかっこうで、彼の姿を見た。

「はっはは、これか」と趙光瑞は、自分の服に手をやっていた。「きのう、ある男から一着もらい受けた。わしも、きょうは一つ盛装をしてやろうと思ってな」

「よく似合います」

劉連淑はいった。そして、彼女は涙ぐんだ。

「うむ、それからな。わしはあの『皇国臣民』とはもう、きょう限りでおわかれた。これからはジンチャ（本物）の朝鮮臣民、いや人民だな。はっはは……」

趙光瑞もそういつて笑いながら、涙ぐんでいた。

「——」

「いや、これは。——人民となったのはいいが、きのうからは、急にどうも涙もろくなつてしまっているかん。わしはいままでは、もう涙など涸れてしまったと思っていたものじゃが……」と趙光瑞は、その晴着の背広の袖を目にあててこすった。「ところで、わしはいまあんたがいないので、実はびっくりしておったところじゃったよ。わしも相当早く来たつもりではあったが、もう西大門へ行ってしまった

かと思つてな」

「西大門へ——」

「そう、西大門刑務所だ。きょうは、これからみんなで出獄する愛国者たちを迎えに行くことになっておる。さあ、あんたもきょうは盛装をして、晴れて夫君を迎えに行くのじゃよ。いや、待てよ、いま何時かな。うむ、まだ六時まえ。とすると、九時からというから、まだ三時間余もあるな。それじゃ一つ、朝飯を何とかして、それを食ってから行くことにするか」

「はい。いま、すぐ用意しますから」

「米はあるのかな。なければ何でもいい。水だけで、真似ごとをするだけでもよい。はっはは……」

趙光瑞はまた、あたりにひびきわたるような声をあげて笑つた。まるで、一夜のうちに、すっかり人が變つてしまつたようになっていた。

劉連淑はこんなときにとつておいた白米をとりだし、さつそく朝飯の用意にとりかかった。そのあいだ、趙光瑞は部屋のなかから、外の彼女に向つて体を乗りだすようにしながら、きのうからのいろいろな動きについて話した。いまは、誰はばかるところのない大声だった。

彼女は知らなかったが、死んだように沈黙していたと見えたソウルも、底の方ではすではげしい渦が巻きおこつていたのだった。その渦巻が突風をおこし、大津波となつて襲いかかるのを恐れた朝鮮總督府は、早くも正午の天皇

放送以前の十五日午前六時に、在ソウルの進歩的民族主義者であり、独立運動の闘士として知られていた呂運亨^{リウウンヒョウ}との会談をはじめていた。

これがのちにいわゆる呂運亨^{リウウンヒョウ}遠藤政務總監会談というものだったが、遠藤は「戦後の治安維持」を呂運亨に要請したのになし、呂は「政治・思想犯」の即時釈放と朝鮮独立のための政治活動の自由、三カ月の食糧確保のことなどを要求して、両者の会談は一応の合意をみた。

そこで、一九四四年のはじめごろから、ひそかに朝鮮国内の同志らと地下組織としての建国同盟をつくっていた呂運亨は、ただちにその建国同盟を母体として、早くも十五日のうちに建国準備委員会を結成していた。

そうしてきょう、呂運亨ら幹部たちが先頭に立ち、西大門刑務所から釈放される「政治・思想犯」といわれた愛国者たちを迎えに行くことになっているというのだった。

二日を出ずして、いよいよ行動がはじまつたのだった。人々が動きはじめたのである。

劉連淑は趙光瑞からそれを聞きながらも、どうしてだか、体が小さきみにふるえて来てならなかった。彼女は一言もことばを発することができず、ただ、だまつてそれを聞いていた。なにかことばを発しては、それがいまは、どこかでウソになるように思われたのだ。

劉連淑はこの二年近くのあいだの、自分の苦勞というものを思つてみた。結婚一夜で、翌日ソウル駅頭で白省五が

逮捕されると、彼女はすぐに白家から追われて出た。はじめは逮捕をまぬがれていた行商人・李漢相の手配で東大門外の清涼里のある家の一間を借りていたが、間もなくその李漢相も北の咸興で逮捕されると、こんどは趙光瑞と白家の執事尹甲徳とのとりはからいで、西大門に近い現在の松月洞に移った。

ここは白省五の入れられている西大門刑務所の近くでもあって、彼女としてそれ以上望むべきことはなかった。したがって、彼女としては、自分の苦勞というべきものはなにもなかったとも思えるのである。すべては省五とともにある同志たちの配慮と保護とによって、彼女はこれまでやって来たのだった。

ことに、それまでは見ず知らずの、ふしぎな地下運動者であった趙光瑞の親切は忘れることができない。忘れてはならないと思う。その彼は、きょうもこうして、朝早くからやって来てくれたのである。

劉連淑は、小さな膳をかこんでの趙光瑞との朝食がおおると、その膳を横へやるのといっしょに、彼の前に両手をついた。

「これまで、いろいろと、本当にありがとうございました」

「ああ、いやいや」と趙光瑞は、あわてたように手を振った。「わしいはいまごちそうさまをいおうとしたのに、それをさきどりしてはいかんよ」

そこへ、彼らの食事のおわるのを見はからっていたらしく、母家の中学生、金相寧が縁側の方へ寄つて来た。

「ちょっとお説きしたいのですが、いいでしょうか」

金相寧は、連淑ではなく、趙光瑞に向つていった。

「ああ、いいですよ。何ですか」

「これですが——」といつて、金相寧は手にしていた旗を縁側にひるげた。「お年寄りの人だったら知っていると思ふんですが、この四方の卦はこれでいいのでしょうか」

金相寧のひろげた旗は、いま彼が絵の具を使つてつくつたばかりの太極旗だった。もとは日本の日の丸の旗で、彼はどこから聞いて来たものらしく、その日の丸の真ん中にS字の線を引き、一方を藍色で塗りつぶして、四隅に四卦を配した連製のものであった。

「うむ、なるほどな」と、趙光瑞はまず、それがもとは日本の日の丸だったことに感心したらしかった。「わしも実は、ゆうべみんなでたしかめ合つたばかりで、陰陽四卦の配置や方向については、まだよくわからんところもあるが、まあ、きょうのところはこれでいいのではないかの。はっは……」

「ああ、そうですか。わかりました。どうもありがとう……」

金相寧がそれをいいおわるか、おわらぬかだった。そこにいた三人のものは、急に静止してしまい、そろつて耳をかたむけた。たしかに聞えたはずだった。いや、聞える。

「——ドクリプ マンセイ！（——独立万歳！）」

「デヨソン ドクリプ マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」

それはどこからともなく、まるで地の底から、突然、湧きおこったかのような声であった。早くもソウル市民の示威・決起がはじまったのだった。

「きえッ——！ おくれた！」

金相寧はまた、きのうとおなじような奇声を発し、そこにひろげていた太極旗を引たくるようになつて飛び上った。彼は急いで用意していた竹竿にその旗をくくりつけながら、外へと向つて駆けだして行つた。

「はっはは……。どれ、わしらも一つ出かけるとするか。

わしらもみんなといっしょに市内をひとまわりして、それから西大門刑務所へと行くことにしよう」

趙光瑞はそういつて、彼も、もう立ち上つていた。

真夏にしては珍しく、空は低く雲が垂れ込めて曇つていたが、ソウルの街という街、通りという通りは一変してしまつてゐた。これまでの、日本の植民地下に生れて育つたものには見たこともなかつた太極旗、赤旗、旗、旗、……旗の波だった。その旗をかかげた人々が通りを埋めてぎつしりと詰まり、そして口々に叫ぶ声は一つだった。

「デヨソン ドクリプ マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」

「デヨソン ドクリプ マンセイ！ マンセイ！（朝鮮

独立万歳！ 万歳！）」

ああ、それはどんなひびきを持って、どんな感慨を持って彼らののどから奔り出たものであつたらう。感激、感動などといった、そんな生まやましいことばでいいあらわされるようなものではない。

街の通りは、電車やトラックも走つてゐた。だが、それらにも太極旗や赤旗を持った人々が鈴なりだった。感電やすべりおちる危険もかまわず、人々は電車の屋根のうゑにまでいっばいだつた。そしてひっきりなしに手を打ち振り、叫んだ。

「デヨソン ドクリプ マンセイ！ マンセイ！（朝鮮独立万歳！ 万歳！）」

電車はそれらの声とともに、ひっきりなしに警笛を鳴らしてゐたが、しかし、急いで走るつもりなどは少しもないのだった。運転手や車掌自身汗だらけの顔にいっばい笑いをうかべ、彼らもときどき窓から両手をさしだしては叫んでいるのだった。

「デヨソン ドクリプ マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」

もちろん切符など、そんなものを売つたり、買つたりするはずがなかつた。

この日ばかりは、人々は誰もが、誰とでもが知り合ひであり、友人であり、また同志であつた。いままでは見たことも会つたこともないものでさえ、いっしょに手を取り合ひ、抱き合ひ、そして踊りだした。街角はそれらの人々の歌や踊りで、いくつもの輪がつくられた。

電柱などに貼りだされた、真新しいビラが目につく。それも、おどるような墨書だった。

「わが朝鮮は解放された！ 解放された独立民族の矜持をもて！ 日本人には手をだすな！」

「日本にまだ、三百万の同胞のことを忘れるな！」

建国準備委員会の手によって貼りだされたものだったが、しかしその日本人は、きょうはどこにも、一人として見当らなかった。

みな、それぞれにどこかで息をひそめているらしかったが、かりに彼らが見当たったとしても、人々はいまはそれにかかずらっている余ゆうなどなかった。あるいはそれが日本人だったとしても、人々は知らずに彼らとも手を取り合って、踊りだしたにちがいない。人々は、いまは無我夢中だった。よろこびに酔っていた。

そうして、この大群衆はやがて二つの緩慢な奔流となり、この日からの自分たちの指導者をもとめて西大門刑務所、麻浦刑務所へと向って行った。きのう十五日からきょう十六日にかけて、朝鮮全土にわたり、二万数千人の「政治・思想犯」が釈放されることになっていた。

西大門刑務所前はずでに人々でぎっしりとなり、ここも太極旗、赤旗、……「出獄万歳！」などと書いた旗の波であつた。自省五にたいする劉連淑のように、出獄するものにたいしては、それぞれの家族や親類縁者などが来ているはずだったが、ひしめき合う人々の波のあいだにあつて、

どれがそれであるのか、誰もわからなかった。

「デヨソン ドクリプ マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」の叫び声とともに、ここでは「デヨソン ヒヤッグミョン マンセイ！（朝鮮革命万歳！）」という声もまじり合い、やがてそれは、「われらの指導者を早くだせ！ 早く出てこい！」といういっせいのシュプレヒコールとなつて、あたりを圧した。そこへまた、人々があとから、あとからと押しよせてくる。

そんななかにあつて、劉連淑はやつと尹甲徳老人の来ているのを見つけたのだったが、

「よかった！ よかったのう」と尹甲徳が連淑の手をとっていつているうちに、二人はたちまちまた人波に吞まれてはぐれてしまった。劉連淑は、刑務所の鉄門の近くに立っているだけが、やつとだった。

やがて、その西大門刑務所の鉄の門がギイーと、長恨のこもった音をひびかせて開かれはじめた。つづいて門の向うで待機していた青い囚衣のままの出獄者たちが、そこからどつとあふれるようにして出て来た。

と、あたりは一瞬、急にしんとなつて、しずまり返ってしまった。と見ると、「ワアッ」という、人々のいっせいの慟哭がそれとかわつた。

遠くにあるものは出獄者たちの姿が見えないので、まだ「——ヒヤッグミョン マンセイ！（革命万歳！）」のシュプレヒコールをつづけていたが、近くにあつたものたちは、